近世説美少年録 二編 二

へ13
3567
7

門 ヘ 13
號 H.3567
巻 7

近世説美少年録第二輯巻之三

東都　曲亭主人編次

稲田大学図書館
昭34.6.3 受
藏書

第十
面

憂苦訴難く泣て帰帆を俟ち
繁華親易く漫ふ遨遊を支とす

紹前齣復説宿六阿可加ハ初阿夏と福富の宿所へ汲引せしめられぞ。
彼ら訪来る折毎ゴ年来親しうのゝしられる。阿夏ハ這回の送暑ふとく。
或ハ樽筍硯笥旅行ゆ西女の喜ぶ物ゝ件の夫婦ハ取せふけれハ宿六阿可加ハ
受教ゞて主人の風ゆく送りんとも用意をする程ハ宿六とその嘿昏より猛ふ風
邪ゴ冒されて次の日も臥てをり。ゆの故ふ阿可加ハ阿夏母子の啓ゆ者とる
ゑもゆるゝれば本意ゆとのゝ賞えをり。却説阿夏珠之丈ハ凡作景市ゆ送
られくゝち相譚ひて白く程ふ久礼畑とふ郷まで来ふけ。這人家盡処ふ取

寂寥る酒と飯とを賣る家あり。門に立て屏障子に云云と記しぬ。既に
亭午になりしころ聊先に進みて居る阿夏の後者共侶に這廓前に立在く後
に来る珠之丞と両箇の総角とを招き近つけ。ゆく袂を分ちたる齊一裡面に
進み入りぬ。牀几に尻をうち掛れば、おのれとたちまち一箇の老人遽く出迎へて阿
客とるべく酒をも召せ。飯を進らせんやと問へば阿夏ちらと仆葉に勿論
飯もたべん。菜美味何々ぞと問へば、されば。シル。炙鮒に泥鰌の濃汁、獨活の酢
茹もの。どれに阿夏の領ぜず。吾侭に泥鰌を好まず。あんに限り肴を半紙
前路を急ぐ旅なれば、竹葉も飯も這人數に合ちたまへ。頼むぞとふれあるべい
声ぬり立て。誰と来よ。お客の急せるに。窓焼ぞと呼れい妻やあんに心と苦し。
奥のつまり出て来つ且阿夏ホヨロ詞を述べ。忠に蒼柴折焼ぞ。美味を
嘉びを程に。あるべきまたまた酒を盪し。折敷に肴を安排べ且阿夏ぐ身

退ぬ。て来つ程もあるに妻共侶に五前の飯を盛るべく誘とく躰く羞
ゆけり。そば椀碟の垢染床鼠色る高盛の飯に折敷の猫脚に相応し
ぬ。とうち笑ふ珠之丞ちまたまた盞とる汁に半椀澄く。鏡に似う人息の。ろ
きに替る旅なれば塩梅さに田舎備れど。食餓これば要時に惜ぞ酒を喫
飯をたべく腹十分になりぬ。ぬくてもに別を惜を立難く。珠之
丞と相譚をるに阿夏に急に推禁めく。和子達いとく還りの家翁の俟りび
ぬ。とうに作景市に別を嘆息と。阿母公を周防へ赴く。何日に又
かう来まるべき日に長るに。一二里に送らとひ。とふと阿夏に皆あ。ろ
いろい誠心をとく。秋に別れども。送懐やいかで何処で別るとも送懐
ぬ宿六便の来まるべ。かへさも心をやんを。十五に足らぬ総角達の吸次を。
影護り。よりや是首ゆく別るとも再會の日はいつのあるべ。吾侭と苦し。

ゆふ。とゝふ珠之丞も嗟嘆して。母れの遠慮寔に以あり。凡公も景公も豫ての盟約を忘れぬ。今の別い惜むに足らぬ。迭ふ年長時と得ば全聚るとゝろぞやう。こゝく涙ぐましかりとゝろれて頷く。凡作景市。やう爲くその意に任せけり。有然而阿夏い昼餉の價を。あるゝに問ふく殘を取らぬ。誘とく齊一外に出そやよ和子逆よ。忘れぬよ。家八分ゆも奥ざる方ゆも送るく傳語を稟ーてこゝ。ぢーべく。と先に立ち。母ゆ引ゝく珠之丞。後者さえゆ口誼を舒て。西を投てぞゆく雲水の世と。嗔に春の日も秋の名れ心地せり。凡作と景市い姑く其処に立在ゝやとゝるゝまゝ。日送りけり。然れば母子いその次の日ゆ京師遍く求めけり。阿夏い心ゆ出ゆう。舊里ゝ〻彼処ゆ。親類もゝく友もゆゝ。名所古迹をゝまゝくほゝとく。花鳥ゆ浮ばゝあゝく。旅ゆゝ。ゆゝ邁もせん年歴ゆけれど京師ゆゝ。ゆゝ生れる人のゝゝゆゝんを。憂ゆ立ちゝ。恥ゆ。ゝゝ所為ゝゝ。と尋思をゝく京へ入ゝく。直ゆ浪速ゆ赴け。

ゝ。ゝゝあれども暮春の旅の。前路い摠て花盛ゆく。民の門傍も野を山も。眺望ゆ追遥ゝゝ。心い其処ゆゝ。田打つ。細輪の田井ゆ蛙鳴く。曛昏毎ゆ宿りを累ぬ。ゝゝ三四日とゝふ程ゆ。兼ゝ畝ゝ角組む浪速津の船長の宿ゆ著ーゝゝ。綜云云とゝを告ゝく。便宜の出船を索るゝゝ明。後の比い周防へ飯る船ありとゝふ。傳心ーくて且く是処ゆ逗留ーゝ。扶福富へ遣ぬ。欽びの消息を書写ゝ。又陶瀬十郎ゆ贈んとゝゝ些の土産を買とゝゝをきくその日を。俟程ゝ。立い夙めく船を出ぬと。ゝゝる甲夜の間ゆ阿夏い客債を亭主ゆ取らぬ。水行の足を問定め。福富ゝゝ。隷られて。その所まで送ゝる。後者ゝ。労ひぬ。件の書簡を。禾女ゝゝけり。春の夜ゝゝ果敢ゝく明く。追風よーと罵騰ぐ。舟人ゆゝ急ぎ。阿夏い珠之丞共倡ゆ。そゝく三板ゆゝ乗ぬ。そゝ弘舸ゆ赴くぬ。後者い水際ゆ看立く。籠子を遞ぬ。船ゆ移ーて。母子のゝゝを水主楫取ゆ。憑むと

竹冷文庫蔵

されど陸と水告別をし浦風ふ吹かれてぞ別れける然程ふ阿夏珠之丞が無き舟ふ浪速を出で幾日もあらぬ順風いと早くけるふ湿氣さへうちも續ぎ行かば是首の港口彼首の漁村を歩歩船ふのみ日来を歴つ春過ぎて夏も立ち陸月の某の日ふ辛くして周防る山口ふ著けり長き水行ふ頭病せ一程近き湊の町ふ休ひく御母さへ子さへ欲ーさふ再生る心地しつ船より出て程近き湊の町ふ休ひく御道守の為ふとく人を傭ひ籠子を肩ーて大内家の城下る鶴峯ふ赴たり。栗津屋祥八と呼ー喚ーる客店ふ宿を投めて僅ふ疲労を慰めたる阿夏へその霄逗旅主人祥八を招きて此の囚主の御内人ふ陶瀬十郎とふ刀祢あらんぞ宿所へ何処ぞと問へば祥八眉を顰めて不吉然る人ふ知らぬ者大くこれ出ぬ者ふべーとふふ阿夏ふ亦訝ぶそうぞうしくあらんぞの亭主ふ知らぬとふとも巷ふ出で人ふ問ふ者の宿所のあれざらんや疎ー図ーと肚裏に

出ぬのみ推ーく身の程軽き武士るーぶ人ふ知られぬーもあらん囚主の御内で一二を争ふ御侍の子息と皆ふ問定めくゆひ給ふと頼めども猶ち ろ ぬ生応ーて退ぞる却説阿夏その夜の日ふ巷ふ出て彼此人ふ恋ひ人の宿所を問ふでこそせんかせんと思ひつ起出ー朝より心地猛ふ常るーぶ忽地眩暈きく歩の運びのこれゆもあらねば仮ぎ臥てなり。ぞとそ已べたとるー絡ぶ珠之丞を喚近つけ。けふ夙めく伜の叔父公を訪んとのこ出ふ猛る心地は病あくて一歩も運ー匹ろ。あを月来の舟行ふ揺れ疲労ふそあらんぞ。伜ふ吾伜ふ代ーく出で叔父公の宿所を尋ーよ陶瀬十郎與房めとそこ

かふ人毎ふ問で定ふ知るよあらん卓午ふ特さら昼かるふやーふ官位とそ世たるとふふ領く珠之丞ふ趣きるるぬ。茶さへべて俟ぬべさとそ勇ー身を起ふ童の足の逸ーあ。菅の小笠を引提て外面望て出ふけり。夏の日消ー俟ーとぶ親の心を

知らぬ子はその曛昏ゆ光り来り妊れよげゆも暑ゆりゆ阡陌を隈なくも巡りく。
或い人の門ゆ立より路留く人をも呼留めて云云と諾ねども陶瀬十郎とゆ者を
食知らぬとのを答へりと報るゆ阿夏は起直りそそを不審しるゆるゆ今ゆそを
名を更られく初の如くるゆぞとも陶氏の人るゆぞゆ畳より日毎ゆ外よ出く叔父
公の宿所の知るまで問ゆそを身の務ゆせよ親ゆ孝行のこるゆぞ摠てゆ你の為
るゆりゆやよ閑ゆるめせと教諭て送る日の一宵も千夜と安らゆ身の病
著い癒くぐ。誰い留わぐ篭の鳥啼ぬ泣くゆ弥ませ。苦しゆ際るゆより是よりの
後珠之双日毎々ゆ街衢ゆ出て神社佛閣ゆ遊びくりゆ又ゆと行田楽雑劇の
観場ゆさえ立入て餘念ゆ見日の暮るゆ童ゆ友ゆ狎るゆ来く是首の坊彼首の
市ゆ遊戯敵のいで来ゆけれゆ楽しゆるゆ出るのを果い漸々ゆ懈ゆを瀬十郎ゆ夏い
ゆ人ゆ問ぎるりゆけりゆ中ゆとゆ出ひるけざりゆ阿夏ゆいぞ奥房の所在を知らんと

出ゆ心の且くも已とゆるけれゆ復栗津屋のあるゆ祥八ゆもそゆ家の奴婢ゆゆも陶瀬
十郎とゆゆ者ゆのゆ宿所ゆらまゆ知れゆ守の御内ゆ相識ゆ問質しとゆと時々ゆ
頼ゆ甲斐も夏過ぐその栄月の中澣より阿夏ゆ病若良癒りく起居自
由ゆるりしゆゆ出ゆゆ外ゆ出く城ゆくゆの人ゆ近つく情郎の存や亡や問決ゆぞと
尋思ゆりて初て結髪ゆくる日ゆ迎旅主人祥八ゆ阿夏の身退ゆ来てらゆゆう
曩ゆ屋妻ゆせゆひ陶瀬十郎ゆの事ゆう深くゆ便宜を討めて最も定ゆゆ沼
たりゆゆ當館の權臣ゆて御座せ陶遠江守改房大人の嫡男る駿河守奥
房ゆのるゆ件の刀祢い初名を津守と喚れゆひゆ今より十四五年前つ比
一総上の大内義興ゆ京師ゆ陟ゆく京師ゆ陟ゆひ折障ることゆあれゆゆや大約在京
四稔の程通稱を改られて瀬十郎と唱しとゆ介るゆ彼ゆいゆ恋るゆゆ、ありけん
上の御氣色を紊すく猛ゆゆの地へ追返され無菌てとゆるゆ大約百日ゆゆ

しく御免しを被りて御館に出仕をなしけり。有之し程に、そのかみ父遠州殿世を逝りしかバ、嫡て家督を兼嗣て駿河守に任ぜられ、奥さまをさへ娶りなどして、その次の年にやありけん男児生れたりけれバ、房子丸と名つけたりける。今茲ハ八才歟九才歟十可になりたりけん。爾るに和泉州左界の城ハ、往る永正六年の春当なん館【義興】をふ菊池武俊征伐の忠賞として、前将軍義植公より賜ひたる加恩の地なれど。上ハ御在京年来を歴て【永正十五年戊寅秋八月二日】管領職を辞しなして、遂に当国に帰城ありしより、阿波の三好等が時をえて、動もすれバ左界の城を襲略んと欲するよしその聞えあるによりて、手も軍議を凝しなして、遍あるの譜代なる彼陶駿河守興房ぬしを左界の城の大将になされ、軍兵三四千名を隷られて彼地へ遣されしかバ、興房ぬしハ妻をも子をも皆悉く携て左界に在城せられけるを。永正十六年己卯の春のころよりけれバ、今いんや四稔になりぬ。然るをかれ身ハ彼ぬしの京にて

喚れたりける通称をのミ皆覚く瀬十郎とぞいひける。一人も我も知らぬ等閑となるもいかにぞと報ふに、冒月は塞りてあらず、望ミを失ひし阿夏ハ云妾時応もなせぞ。困じ果る額を拊く沈吟ドハ、扨いふ縁由ハ毫知らで、近江の尽処よりするぐと来し甲斐もなく、飛会の鵙の觜と齟齬ふ人の往方の憾しけれよ。豫て左界なりとハきゝしも、夢になりとも知るよしハ遠き旅宿ハせまじきに、纔に荒磯に舩よせて目睡難し波枕、安からざりし胸のうちおもひハ海と山口の宿も空なる日来歴て、恋しき人にあはん津路とおもひも果なん祥なるべきを、神ならぬ身の初より悟らざりしぞ悔しけれ。什麼いかにせんとなかなかに袖のそ目皮を拭へども、涙のかきせきあへずひとしく貌を更めなかなかなる愚痴にもあらで、斎しく往るよき遇すくはまた陶ぬしの往方知れずとはいふもで、所在を定かに告られし歎きの中なる悦びも、え思ひの地を立去りて左界へ赴きたるべし。とおもひを祥八推禁ぬを悠りなるにあらずもなほ報べきの旨

あるふ歎を制めく笞のくとのふよ何夏ハ膝を進めくそハ何夏で侍るぞやとせきく
問れてけれがとよ今茲ハ京師も五畿内も波風且く静ゝそ四民安堵のよひを
るもそのあくも注進ありけれが當ゐ館軍食てあらゝんゆ左思ハ交代の大將を
遣と陶奥房を召返し渠が年來の勤労を慰めるさに死のそと仰出されゝ
けるハのゆる月のるゆく件の交代の大將ハ既ふうち立ゆひとそ俺們ハ町人のゆゆ
あれハ然るゐん制度を知るもあらぬ仰ハ皆是上の御内人ハ正く笞るゆ
るれが違ゆべくもあらぬく仰るを悠りて又さらゝ彼地へ赴ゆふとも亦蒐錯を陶
大人の左思よなるぞるゆひ比ゆ悔ゆかゝん大人の還らせゆ日の遲速ハ測り
ゆけれども這烝をやゝ過さゆ件の説ハ久ひゆるぞやとハと正首ハ説諭を河夏ハ
笞ゝく歎びくそハ憑ゝるゆ侍ゆ世ハ塞公羽が馬と安ゝん今の歎の今の間ハ然ひハ
なるゆゆ母子のゝを神仏の捨させゆゆるべ倩のゝと按ずるに寔ハ宜ハ言の

如く待が甘露の降る日もあるゆ左思で遭んハ不定ゝ猶ゆ姑く逗留ゝと厄會に
ゝそゆゆべけれ就て疎ゆも出れんがあゝろゆゆ當ゐ館と宣ハ量義ハ京師ゝ
御座ゝる管領さゆのゐん支ゆゝん家ゝ例ゆゝと笞く重ゝ職を辞せゆゝそハ地ハ
ゆゆるゆひハ以ゝそゆゆゆゝそと向ゝが祥ハ微笑て浮世ハ疎ゝ近江路の山里ゝより
來ますゝる女中と笞げゆる疑ひの釋ぐゝそ有ゝゆ一五一十を説ゝゝ言長ゆハ
ゆゆべれどもけゆハ聊暇ゆ詳ハ生ゝん笞ゆ近曾京都の將軍家義植公とせゝ
しゝ東山殿義政のゐん弟今出川殿視のゐゝ子ゆゝを東山殿養ハ立て將軍ゝゆゐん
ゆゝ時ゝ十歳二歳ハ小ゆゝ管領政元ゆの逆意ハそ伊豆の勝憧院政知卿の弟の御二男ゝ
ゆる義澄公ハ將軍ゝ進ら世前將軍義植公をハ稠ゝく推
篭て家臣物部某甲が宿所へ預置ゝゝを辛くも脱出ゆゝて山口ハ渡
御すゝく館を頼せゆひゝハ義興ハ卿ハ精悍ゝく奥復の軍説を凝ゝて姑く時を俟

出像
第十六
山口の旅宿
瀬戸の内海
鬼ヶ島

ぬひ。永正四年夏陸月に改元ありて浴室を家臣に殺されぬひまゐらの因て京師に
靜るゝぞと問諜者の報まゐせ。ゞ當ゐ館義澄卿猛に大軍を催し義稙公
補佐まゐせ。馳て京師に攻陷て戰ひ捷利を獲ぬひ。然れば將軍義澄公は
近江の岳山へ落させぬひて三稔彼処に御座せ。が音に世を逝りぬひ。その時に
義稙公御太意を遂られて。ゆゑび將軍の拜任せられ故のごとく世を治めく改支
ぬひ。比日見當ゐ館義澄卿の大義大功。儔ふべきもなく冠位三位に陞
さまして管領に成ぬひ。抑京鎌倉の管領は將軍家の御親族志波細川畠
山上杉の人々なるゆゑに成され匝なるゆゑに。鎌倉の管領憲實は一世を獻ひ入
道して當ゐ館に身を寓ぬひ。長門州深川なる大寧寺に御座しけれども入道長
棟菴主を館の御養父と稱まゐし。則執事職を受紹ぶく管領まゐりぬひ。
より。條圖爵の幕の紋さへ憲實主より讓られて今ぞこれを用ひぬ。是より在京年を

歷て當館のゐ權威に肩を比るものなけれど忘仁の兵乱に美公武等しく衰微して。
物足へべくもあらざれば軍役の雜費その餘の支まゐ館の賄ひ。ゞ財用竟に續で
ぬ。難義に及びぬ。加旃御領西に野心のものも往々出て來て隙を願ひ
と。ゞ。その故は當ゐ館に。永正十五年秋八月初旬に管領職を辭ぬひ。
當所に還りぬひ。是より京師に亂れて畿内に戰ひ已とまゐく三好の黨跋扈
まゐく主を主ともせざりゝ。義稙公は去歲元年の春三月の下浣に京師を出て淡路に
没落まゐぬひ。世の人々で彼公を嶋の將軍とまゐ。これより先に義稙公故將
軍義澄公のゐ子まゐ。義晴君を養嗣として播磨に處らしぬひ。義晴公は去
歲の陸月猛に上洛まゐぬひ。その冬十二月廿五日に將軍に任せられ室町の御所に在
まゐ。ども。ゐ年纔に十一ゐ。ゐ將軍に只名のみ世間のよく穩まゐぞと。風聲此処
へも聞えて。若ゐ乱世といへども當ゐ館の御武德ぬ。山陽道に異まゐ。幽豐に

あく民肥たれば京師の乱れに住不樂く所公卿上達部の搢紳家も這山口に移住して當れ館に身を寓めし又近國の坊賈工匠も各々生活の便著を求めく皆ここの処へ来集つ市中に軒を相連ねて屋の上に屋を加え港口の来帆絶る日なければ諸國の名物輻輳して自由ままとなる然れば世の人この地を稱て西の都と喚做す中にも愛に福地にあれば淺ある人い珠を炊き桂を焚て薪にすれども容易なれば物の價の廉く唯是繁華の沿習ぞ客店なども室ありとも他客を雜へ貸際にせず坐席料い勘定外にて輸くあり駿州さる陶與房をいかを詣ふの由縁ありてのまるべき左にも右にもかりく這地に杖を駐めるべく彼大人い先祖より代々御家老筋にあれば威勢とのひ所領とのひヨヌくなぐく元舊家にさの鄙語もいとあり立よりに巨樹の蔭長れ物に巻れよとぞ噫無きに

長物くもふぬぞ時を移しとのひつ呵々とうち笑へば阿夏も俱にうち咲く。現詳るに人物語ふこのもろも定に知られて日来は憂を慰め侍ぬ既に推量せるに如く陶ぬ人に大くに舊に縁の侍るに彼人さるに對面せば求めぎとも資にあらん然るに定め汗外に此の報ひをせざらんやとの祥八又うち笑ひくに叶はじと言左右に今よりの俱に候ものとの声聞やや女房ぞ家公々と呼子鳥ぞつるくも出と多の女客に仏るく親しうのとのせばとぞ仰るこもれば疾く服を撈らる祥八なるに応と合て遽く納戸に方に退るに然程に珠之丞の目も城下の町に遊びく黄昏まめ来にければ阿夏にに伏呼近つけて郷国にあるに報られる絆の趣如此くく既々と首尾りを説示しつまべ今よりの事ぞ叔父公に遭とてせもせんその日を候へとのに珠之丞も敬ぶくに言葉を変へ介らば担立より港口に出で叔父公の船の著くとの風声を聞

定めて優ふ待くとのせとの応答ざるの大人く姑く親と慰めけ侯ば久く秋の宿ふきのふとくく一けふと明く捌月も廿日ふ過く此阿夏が懐ふ考るけ五両の金と用盡く絶ふ二三分残ふ過る現その該もあるく阿夏ハ原是歌妓ゆく世帯未熟の癖ふれい銭を使ふ心を用ひ呂の昼のふあるべく母子の客賃と一日ふ銀六匁と定めれば月ふ百九十匁の没匁ある逗留既ふ二ケ月餘の七八十日ふ過るく今宵財嚢を揮よて債ふ充れと量裏ふ福富村を辞去んと考る比大夫次ゞ計ひく贐の金十両を分ちく五両い珠之丞が虜ふ纏くるけれい尚頼のくて憂とも思ふ件の金の竭る此ふ陶氏の秘著ぬべ考るくんゆを資と為て盤纏ふ物を缺べくゞと豫て深念を考るけん阿夏ハ此の宵珠之丞を傍ふ招ふく潜ふ珠よ你い思ふ旅宿久くなるるが五倍ゞ為て来く五両の金の月来の客賃ふ竭る福富ふの計ひく你ふ持くゆひる金のこゝを此に

ゞ祇長々御苦労々々とのひ被てふとき生せば珠之丞いち驚ぐ胸と鎮めく哺母ハ格別今も頃ふ巻く舊の侯ゆて侯れども金ハ使ふく此るなりとのふ阿夏ハ只果く感ふ涙ゞ噫大瞻る彼金を你る用盡せとて福富ふの賜んゆらく宿ふを定めく比ゞく受取ゞと思ひくども五倍ゞとく女流ゞ世ふ憑に今宿るれば賊難ふる測巨ゞ你ハ日々ふ出ある宿ふ泊ると稀るれども福富殿の教と守りて所要あるまゞ你の虜ふ預置るべるく安ふ侯べと愚と痴ふ思慮ゞ悔くゆよ什麼彼金と何ゆ考る愚ゞ報よのふぞ甚麼ぞと怨ゞ珠之丞も目を揚赤めて母れよさまゞ怒ゞるみゞるゆひゆく叔父公の宿所ゞ詣よとく出されくより日毎ゞふ京師も優ゞ敏華の地を豆るゆ暮るまゞ走ゞ巡るゆふく絶ふ五十や三十の仂鈔ゞ湯も不幾回ゆ飲ゞ茶價昏食是彼ふ一分見せゞ日南の冰忽地消て又一分二分や三分の夢ゞ果敢

なる五両の金の使ひ方を傳ありまでも志ちどもその大かたは知れてあり人集る所なれ
人粒の市ぞあれば叔父公の宿所を知りたる人のあらやせんと思ふぞろふ歌舞妓の
木門に立よれば田舎児ぞと侮られて出ひけるもなくてろふ錢を取られし折もあり。
神社佛閣に参りては叔父公の所在を知らしめと念じて投る十二銅賽錢初穂の蘊
下とて一二百貫の者よりよおもか或は鼻緒を踏断らして草履を買ふ日もすくなく足の爪を
蹴放ちて賣薬店に憩ふ日もあり夕立の傘渡舟錢の没るものとあれば果なきん
身に叱られんと思ひながらも早晩に用盡しと得るりしてれど疑ふるなとありなく懐するを
入れて解出する空搭膊の口さへ軽き布の目に漏るとぞいえて虚涙なるもで有身に。
並立てくいひ繹くを阿夏は聴ずも声戦して嘻口功者にいはべとそのいはひ譯はあるべき
欽定に銭鈔の没ることありとも吾儕に隠して汝が随意使ふく猝の済と思ふな。
いふまでもなく敦圉て權しの火箸合するより手をく背を礮と打徴せば走りも退かず泣

孝沈ぞ母れよ免しなすぞや路費を用盡しても叔父公に對面ありなば外よあらんぞよの其ものを
ば死窖住員の債もその日に抵て貲なるの易からんその日までまてあれよりやがる親一人ら子一人の
身より痛く憎れて世に立甲斐のあるまいがれば覚期を究めて南無阿弥陀仏と
唱へも果ぞ側に措たし纏腰囊を引ずり項へ巻被てなを縊んとなる程に阿夏は吐
嗟と推禁めてやよ珠之介短氣をまちなるものと手を拿くに挑取る財囊で目を押
拭ひ目今侮のいひれし如く物をしたも彼時の程よそ叔父公の再會をまちんまの母子の
うへは安からべしよりや侮よ喪れたる五両の金はその侭ありとも叔父公の資をとるよしなくば
豈三ヶ月とも支んや其処よ心いつかなく子その主責くのが術を思ひがりし愚痴なる水
行の程はまぬれかくあれあてへ宿りを定め折件の金を受取て吾儕の腰に纏て措べからむ
口舌はなのらんと後をまぞも福富ぬしの諭を固く守りて船に契りて剣を索め琴柱に
膠するとうはよ諺にも似くなるめり然りとても銭鈔なくては一日も送り已くらるよ叔父

公に再會せん日まで吾儕が衣裳髪の飾を沽却して所要に充んとおもひ、されどまたその趣を宿の夫婦に知られなばその懐を見透されて憑しき気なくなりなん。この誼をおもふのみ。黎明後の比潜やかに市にもてゆきて售りしが、それより外に手段はあらじと思ひて示しまた珠之介は吟じくおもなく頷きて、嬉しや免しあひ給ふ、その賣物のなるべしも是首の町にも彼首の市にも認来る人多かれば、售る身の質に典るも、この身の随意相計てんあるは、ゆへに家の内の奴婢にも知られるなりとも、又吾儕に任してよ、と潜めき答ふる少年の良らぬ衷にも伶利なるは。あくる日の機も届くぞや、示し合せ親心臥篁の行燈搔起しても子ともに闇に片明の丁子頭を陶ぬしの帰帆の兆欲と母と子が心祝ひも夢の世や、寝よとの鐘の響音く比倶に枕に就きなけり。

第十三回　垂柳橋に客婦絃歌を賣る
侯鯖樓に洛人舊妓を認る

却説阿夏はその次の日に櫛笄と好衣の旅には要なき物とのみ篋中より取出して。袱に推包を誘とて珠之介に遞与けり。示合せしことなれば珠之介は[illegible]竊に市にもて出てゆきて、ある商人に相譚済しけんかの随に沽却して若干の銀を得されど。その仍銀をば推掠めて皆飲食に使ひつ。親の價を詭りて気色にも顕さず。阿夏はゆめとも知らざりしく、介後もおのがくに要用なる物を售ること四五回に暨びしかば件の篋は空しくなりて、今はそれ親も子も身に著たる衣の外に貯禄はあらずなりしかど、陶が資を心當に、唯その帰帆を俟程に世の風声を知まく欲して日々に珠之介を港口遣し、又祥八にも向るとぞ。なまじとしもなく日を送れば紙窗摸つ風の音箕子の下なる虫の声も朝なる夕なる廬の寒き秋も僅になりぬ。かかる左右の使りも聞えず、絃べ阿夏はいよいよ俟わびて又祥八に向ひやと思ふのみ。夏敏き人を呼んできかずゆくなる躊躇て在りけるに、この日も港口へ遣しける珠之介がかへり来て忙しげなる

声高ふ田れよ大変のなる叔父公の成アあと宣へ。左衆の城いかる比敵の為ふ攻落されて士卒いちゝ大将も戦殺されぬよう交代ふ赴くこの大将ハ期ふあらぞ引返せーとのあり。言の虚実ハ知らねどもよーとゑ多ふ報ゑと思へば。飛ぶ仏くふ還りあるとふ阿夏ハ内淡れく立すく考る腰ゟ抜て姑くハあめもなりいぞ絶ふ心を推鎮めく珠よ伺ハ何と思ふ然る風声のあらんゆハ幾遍とるく憑ゑこの祥八とのぶ今まで知ざるとのあるべをや。知らぬをも報ゆらんふとの義るければ虚説るいんとを思ども心のとる。伺ハ如さび外ふゆく言の虚実を問定めよ吾侍ハ亦彼人ふ問めく疑ひと雲者ー。ゆく珠之ゆハ宣ふ然るりと応も果ぬ衛と立く裳と褰げ精悍く港口を望て走りけり折ゟあー祥八を外面より来つ。あの日何処へ出るけん阿夏ふ貸る褊室の邊を過りそ遽く納戸の方ふ赴くを阿夏ハやゝと呼留てゑ事繁くをいさんが問まゝ〜ふるをゑ伺れ

とふと答とハらんー。祥八ゑそぶ伏ふ立よりて坐と占まぶ阿夏ハ声を低く問まく欲ふ他事るぶ日来まぶく憑まうせー。左衆の人のるふるんけふもつぶ見ぶ港口ゆ。ある人ふ問ゆ見とそ如此々々と告侍り勿論童ぶ人偽ふ侍とりてらとるれハ実語とハ思ひども心ふゆ不侍るかー。ゑん多ハいまぶ侍ゆらぶやと問れく頷く祥八をいと困ドたる面色ゆく現然るとのありける。某ぶ侍くるハ四五日前つ比るれども。そゆハ虚実定るぶ然るとゑん多ハ報知て驚ゑさえハ要るる所ゆぶと思ハるーて伺ふ伺るふけふ所要ゆて上の御内人許まるぶ語次ふ諮まうーて既ゆく実を語るる抑當将軍義晴公世を治ゆ初より和泉ハ管領武蔵守高国ゆの領地ふ和アゆ。ゑれふより左衆の城をも豪奪せんと計られるる城の大将陶ゆハ權威ふも憚らぶ心つゆく答まうーて義引べもあーぶりけれハ高国のゆーらゆく奴ぶりく尼崎る後父弟尹賢播磨の浦上るンとふ諜ー合まく大軍をゝて左衆の城を短

左野の落城
子與房妻
子と全うせ
出像第十七

兵急ふ攻かけるなれども陶ぬしハ些も騒ぐ氣色なく且く防戦ふ程ふ内応し
ものありて忽地城ふ火を放ちれバ遂ふ防禦の術竭くて落城と見えしが。
陶ぬしハ憑切る士卒二三百名を従へて後門より突て出寄隊を東西ふ蹴靡
けて一條の血路を殺開し妻子を扶導して濱里の方ふ走り準備の快船十艘ふ
一箇も漏さず打乗せて洋中遙ふ漕去折りし只是運の窮ふありけん猛ふ風
濤吹巽作れてぞう九艘ハ覆りて幾百箇の士卒眷属大魚の腹ふ葬らる。亦
一二艘ハ風のまにまに往方もしらずなりしとぞ。然程ふ比奥房ふ代れて遣されたる
大将ハ彼地まで到著ぞ途ゆくよしを傍しかバ驚きながら取て返し敷も漏されし城
兵も漸々ふ其の地へ脱れ来て具ふ注進しけれバ上ふも其の趣を聞食て惜ませ玉ふ
こと大方ならず。左畏ハ敵地ふ夾れたる最も危き孤城なれども。将軍義植を京師ふ在まし
程ハ後楯と思ひし世の形勢の俄頃ふ変りて権威他人ふ推移りしも昨今といふ

なかりき。其所ふ心のまゝ届かず。衛ハ交代の大将を遣しなどせず徒ふ奥房を喪
ひしぞ過失ふありけると御後悔ありとなん。されバ其筋なる方ざまの物くるひふ
浮る言ふゆらぎつゝと正首ふ説示せバ阿夏ハよくと泣沈む涙の雨ふ憂愛みの虫れ。
枝ふ離れし心地して。たゞくもなく歎しと救あるべきふあらざれバせんかたなくふ退ひ久しく漂る
うちなきし貌を更め。世ふ薄命なる女子の昔も今もすくなからねど吾侪ふまさるはな
ヨクなくんや。舊里ふ住びく出ぬ比ハ夫を喪ひ又ひとり情由ありて怨を隠しく
仇ふ随ひ果ハ近江の山里ふ留められつ年を歴て恋し人をたづね来し甲斐も汀
渚の片便り。磯うつ波もかへりまん日を僥く俟けるふ討殺さるゝハ武夫の沿習とハ
いひながら知ざりしくそれハ大洋の底の水屑となりしと人傳ふ聞く
けふよりハ誰ふ憑ん身のよるべ進退谷りてはあつても別れハ悲しきふおゝそ別
れし本意なさよ。とてそと思ひのあへず哀しみるると声立て泣まびろび擗地と泣沈めり。

祥八郎とゝく。彦叮寧に慰めつゝ。なほ奥に退りけゝれば阿夏八千さに。身の措処を定めゝそ涙の間はとゝるゆゝさる久後を思惟るに。走るゆに必速く死こる人にゆくとゝろ。陶ぬのゆいも生涯甚に歎くとも。その甲斐あるにあらざれば。絶もせんに当然る身の難義。既に盤纏の竭これば。近江へ還りゆくゝ。然りとゝく馴染もるたの郷ゆく。何をして世を渡る。元身ひとつぐゆるゆが火焼水汲む奉公とも扶ありるんを愁に尚総角る珠之丞を推乃ての要とるそたも今ゆらに微かゆゝる。又集に商賈許仕へく小厮にあれとゝふとも保人に立つ人も得ぐく為人も亦心のとゝる。彼福富の吝嗇る百金ゆるゆ。以へた五色に玉を返せに五穀とゝの長に月日を。ゆゝの侭に役使に。孫に琴さえ教こる。奥印可すそ取らせるゝゝ。世に定式の謝義ゝるゝゝ。夢にゝゝゝゝ。別るゝ折に十金の贐をもゝ恩ゝるゝく。賸五金を珠之丞ゝ要に纏ゝたゝれゝ役ゆも立ゝるゝに。那

折玉の價そとく。切て百金贈られるゝゝる時ゆも心つゝくて。ゝもゝもゝゝる遭て恨を述に。ゆの山海千里を隔る旅ゆ。あれば阿宅言ゝゝ。天飛ぶ雁の侶に後れ山の猿猴の林に離れ。憂ゆもまゝ親子の性方を定め難るも彼人の心穢きに。よりそゝさゝゝゝと。壮る向ひ腹に答う身の幸るゝに人を怨ゝの愚癡妄想久帰るゝゝ近江る籠勝ゝの神るゝゝ。衆私勝ゝに浮世の人情腹立ゝと哀しゝに衣引被ぎ臥ゝて。且くして珠之丞ゝ。ゝゝゝ束ゝれば阿夏ゝゝ頭を擡て枕方近く侍らゝ。郷に祥八郎ゝ。ゝゝゝ左衆の実説如此々々と報知しゝゝ歎ゝば珠之丞も當惑のゝゝ又紅く嗟嘆に堪ず。倶に頭を病ゝゝ。素よりその性老実ゝ。総角ゝれば。ゝる時商量敵ゝるゝゝゝ。阿夏ゝゝ。甲斐ゝて心いゝく安らゝゝ。その通宵寝られ。以隨に獨熟ゝゝ。盤纏ゝゝ。携ゝる。物ゝる喪ひ。ければ客賃の債をゝゝゝゝ。ゝゝ居ゝゝ。

せくゆくゆも去易かるべしと面ぶせるる所行るべらまるで夫婦は懐を著ーく
憑まべ羨引て憐るとあるりやせん告ぎ人のおるも知れ。と尋思とつ次れ日ふ。
祥八夫婦がうち揃ひて納戸ふをる後窺ふくそぶほとりふ赴ふくきのふ左男れ実
説を報知され歎びを竊ふ述て扨ふ安ふ陶ふいうぶ亡夫の親族で伯母ども。
道遠ければ年あまく音耗絶て伯ーしたの春猛ふ歩ひ起ーとおるようぶひく
来る彼人京師ふ在せー時預まるふせーー金あれば盤纏ハヨヌく携へぶ十金許伯
アーを半分ハ路の用心ふ与ぶ兒の虐ふ纏措せを遊び耽りつ何の間ゆ失ふられぶせん
まべあらぶ只陶ふーを心當ふ行箧の物を售ふてつけまぶふ伯ーかども彼人空ーく
るりのひて頼む樹下に雨漏ひて何処ふ立ん楽浪の近江も還りやこうり狀れぶ
とそ馴も習ふ薪水の技を做まくまるとも人の役ふ立べくも伯ーぶ初京師ふ在ー
程糸竹の技ーも人ふ愛ふせーーるれば鄙語ふ藝の身を貧るとふ言ふ有りもせん用

より日毎ふ街衢ふ出ぶ。ヨヌる所人の門々ふ歌曲を賣て親子の口を餬ひとそ歩び伯
れ。客儀の債のあるべれども心ふ取りくえ願ふけふより生債ふーて留めのべ
寺ひるんとあるひ入ひ口説く涙ぶ出ぶ進けり。妻ふ与ふ祥八ふ。ほぐくとうち
ぶそ尉心ふ出ぶ頭を傾け噫ふ身親子の薄命るる今ハ女ふくるんとハ歩ひけ孫
うち驚れて痛ふ伯ーゆる弥増うふ。ふ男子るんふ言品もあべけれど同行ふ十
五ふ足らぬ弱息ふ出ぶ。二十のうぶヨヌく過ぎとそる女房盛れぶこの地ふ相
識るうと宿ぶ一期のるふ馴染ふ出ぶ。後ふ出ぶ来も出る陶大人ふ由縁ふ女中ふ
出ぶ門謡ふ出ぶ。その日ふ一ふ朽ちく心裏恥ーくも歩れを人の落魄とのうぶ。然ぶ出ぶ
尋思あひ心の中ふ推量ふ歎息の外ふ出ぶ。然ぶとて今ふ出ぶの如く阿容ふーて
措ぶ出ぶ。ふ身ハ且ふ子の隨意挿了ふ出ぶ留置て戎ハ水汲
ふ走使ひ。小要を達ふるるるとふ。彼子の客債ハ取らぶるるとふ。とふ又女房も共

侶に嗟嘆して。家亡代の客店なれども。かく哀れなる客人を留めしハ少しも偶合ざる縁あればこそ
損をも甘じ今日まで立よりも見ぬ人とのみハ前つ世の。約束ならんぞかし近属上の御
家中へ給事まゐらせたる女児が稗子し時よりなれし絃あり。樫棹それが上よき物なら
ねど。貸まゐらせん彼に。ぞ。と。問慰めて他事もなき夫婦齊一情ある。言葉の露に
又袖濡らしも阿夏ハ。いぞ推辞むべき且感し且欽びて。珠之丞ぞ々をのミ目の馮む親
心誰もかくてあるべけれど。身には不楽し朝榻の。猟篭取る身にもあらねども。祥八夫婦を
窮鳥の懐に入る心地して。猶も姑く慰めけり。却説阿夏ハその次の日より。彼三絃を借
取て笠深くまたつまつも鶴峰なる城下と其処ともすゞろに謡に今様早歌説
經の節も章句も都備し声ハ涙に隠口の。それならくも朽ずる浮世渡の憂業も。
日を歴る隨に稍熟て古の都の繁町々を送るく唄ひ逍遥れども一声價一銭のもの内なれバ
藻塩草掻集めても一日まで銭一緡ハ得易からで。況雨の日雪の朝ハ。一椀の糧も空し

かくて初京師に在りし比物足らぬ折々に木偶盗が小夏をわきて四條河原に立
寄りしたる事もしくに出でく彼子が其の世に在るならば資なるよりも継女児か
労せる男児ならん母の為になるぬのあると呟く。のミ人に告べきならねバ心で泣ぬ日ハ稀
なる母ハも之珠之丞ハ宿の庵逼に役使れて習ぬ抜に暇なくて。今や初冬になりしバ霜柱
なる朝にもいとく起されて水を汲入れ北風寒き夕まに氷を摧きて浴桶を焚く艱難に
べつもあらざれバ人を怨ミ親をも恨ミて阿夏が宿にをる折にハ身の憂苦を数立て。
吾儕が近江に在りし日ハ習讀書を務わせしのミ三度の膳も人に齎眉させ飽
までたらへ暖に衣て心にかゝる雲もなく樂しかりけるヨヌかりしに不覚ず悠ア々しかん身ハ
淺慮生る欲死せる欲定ならぬ周防の叔父公にあハせんとそ水行艱苦の旅宿を
かさねて遥々来る甲斐もなく叔父公ハ沼遭逝まして辛き目にあハ朝なゝかくてハ
命も續がたくなり赤貝の口閉る似児這戦をえなるぞや親子乞食になり果なが。あん

星煞ハ循運ニ俗ホマハ事あせのようわと

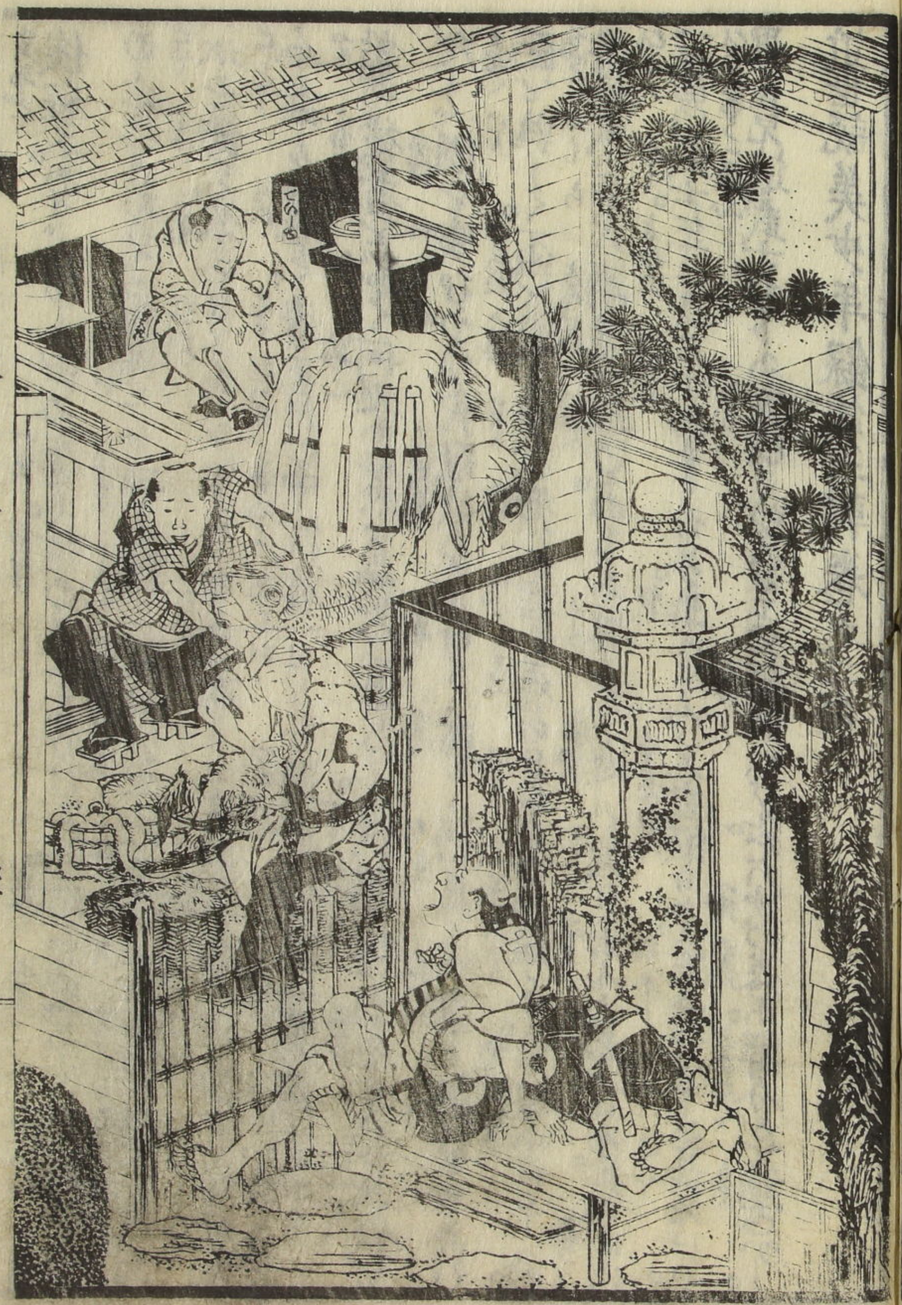
星煞の循運ホよく吉凶あの裏ようり

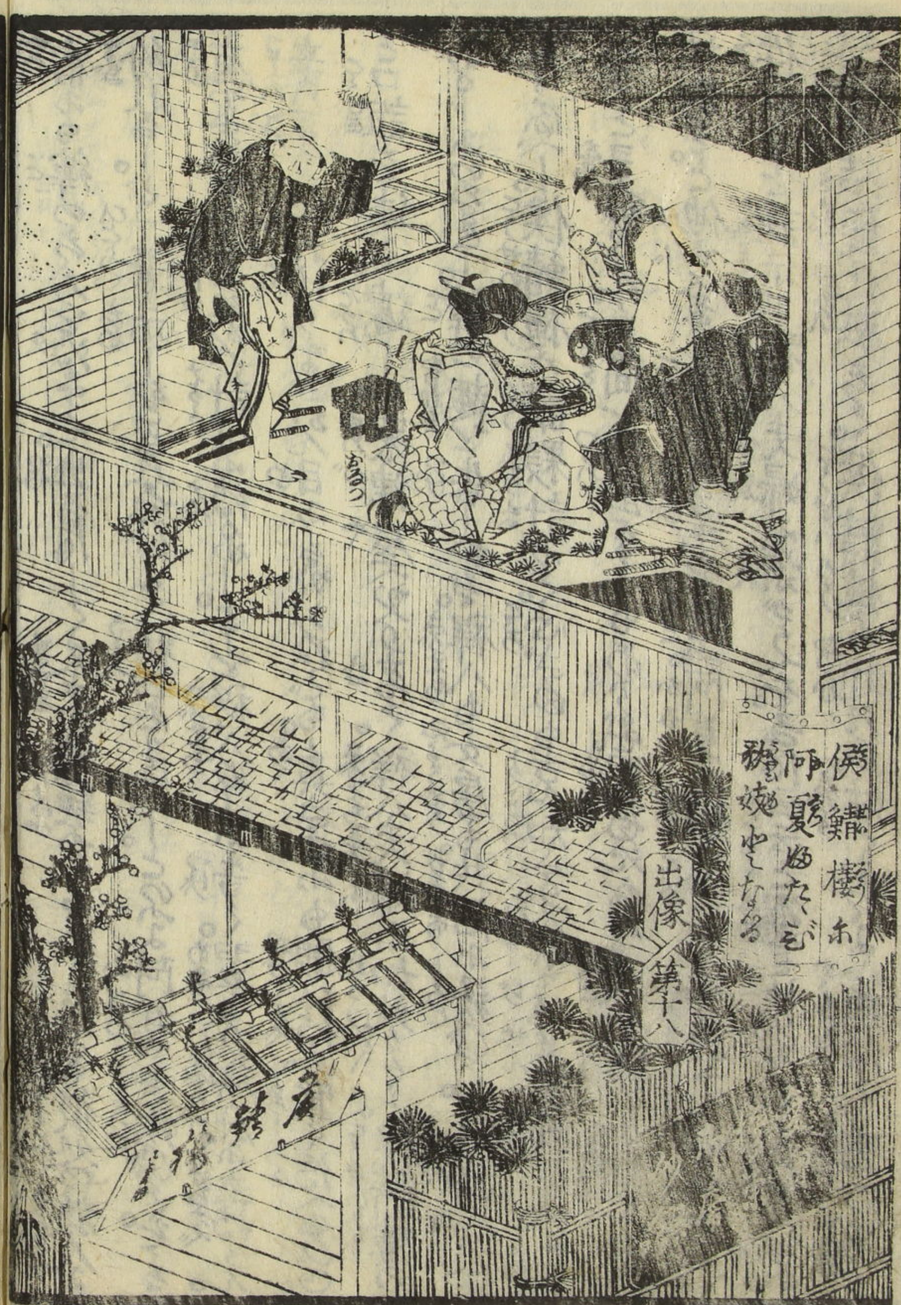
身ハ本意依樂ニ欲と飽まそ親を窘むれば阿夏も泣堪ぞ声挙り立て又とも不孝の吉も凶も皆是時の日生数であるのを今ちら不足ことのとの福富殿の児アー五両の金をあの仆よ仆ホ使捨られぞ。ようやこの地を夜逃ホしても近江へ還ホ路費ハわふんを已が隨る支ちらく親に元食とさーるぐらく庵働ぞれどとくちぐるなすせざふんやと罵りつ又罵りつ親子角口仂る血で血と洗ふ煩悩の瞋恚の猛に照されて黒くー恥も赤うなる顔の楓葉ぞ散るまそホ肩ド魂人い食傍痛くぶけつ。ちらハあれども親子の恩愛阿夏ハ竟ホ詮ハ肩ても言と意ハ表裏ぞ。その児を憎ーとふつぶ脆くも折る柞拘や厳寒に詰旦も亦生活ホ出よけつ不題鶴峯ハ城を距ること東のくこ十町許ホ柳町と呼做ーたるハ最熱閑ニ地方ぐらホ一條の川あるく。渡せる梁を垂柳橋とのう。橋の盡処ホ年ぬりたる柳拘あるホよりてこの地ハ夏ぞ上昔とちく舩よりも歩よりも群つ人の遊ぶと。壁ば京師の四條ホ似ぐう。状れば茶店もいとヨヌ

ぞ。飲食を宗とぞ。商賈の家掛ぐふねど冬ホ入りてこの生業を轉じて寂漠ぐ居のとるホ垂柳橋の邊る侯鯖楼とのう酒楼のこ年中客の絶ることなく冬ぐこ雪貫雪の船と寄せ春ハ観梅の轎子を這麝前ハ卸さぞて即席の酒肉のあホ囊中ぞ盡ーとも恨ぞと世ぐる風流士ヨりの問話休題阿夏ハ件の侯鯖楼の熟閑ー客を稍知りて日毎ホ来ぐ門ホ立ぐ小曹子を如ホ歌ひふけれホ醉ぐ妓楼ぐ散動ぐる客の懐帛に銭を包ぐて投ぐるも稀ホあるけり。如之而日来を経る程ホ有一日這酒楼ホ客の小絶ー折とも知らぞ門ホ問夏ぐ立けるとあるハ竊ホ呼入れ卒ホ小ぐ長ぐ。ぐんぐ仆ホ世ホ凋落てゆる生活ぐまるホやあぐんぐの地の人とハ云えざるよ他御ぐの事ぐ侶を喪ハぜんまぐ。この技ホあぐぞや何処を宿ホのぞと問ぐて阿夏ハ悪むホふうぐ。あぐ憑ーくも問せのホん情の程推量られぐ。ぐと絞ーり付るのー安ハ京師のの人ぐ。身の幸ぐこホ近江ぐ。山里ホ移住ぐ憂歳月を送ぐ。其処ぐ。ぐ又住ぐぐの地の

所親と心當ふ尚絶角る児を捧てたゞく来る甲斐もるゝその親族いもの地ふ行らぬ。
剣近曾多まるゝゆゑと風の便りふ聞くえうこゝる程ふ盤纏竭くゝふとせん術る
けれども見を宿ふ預措てゆく浅ま死生活ゝつ一日くと送り母。宿ふ出より西のゝ
博労町る粟津屋と問せゆゑ隠れいゝ恥ゝ辱ゝとのひ日て顔ふ鬢の袖牆ゝ声も
涙も筆もけり。あるゝいれをゝち聞くゝ出ぬ違ねその身のゝ子を捧て
よゝべの舟の楫を絶ゝ旅宿の艱難然ゝあゝえ縹致とのひ歌曲とのひ門謡ゝ
惜ゝ居ゝ妙音妙ゝ以あるゝふ就く一條の商量あり。知ゝ如くゝ家ゝ
日毎ふ客のヨゝれど冬ゝゝらふ歌妓ゝを又所望せゝ居く折他町へ人を走
らゝ。呼迎ゝ煩ゝく火急の要ゆゝ立ゝこゝ和女郎ゝ家を宿ふゝて客人の
霜ふ応ゝちゞ霜枯ゝゝも門謡の掙ゝ優とあゝべゝ彼粟津屋の祥
八ゝ宮嶋講中ゝ居をゝく俺ゝ素ゝ仙識ゝ。這商量をゝとゝ

宿ゆゝ縡のゝゝゝて出ゝ居ゝく又来ゝ疑ゆゝあゝ孫とゝ。彼処の旅人ゝ
紛れゝゝと一筆示ゝこゝれゝゝく後ゝゝ居べゝとのゝ阿夏ゝゝ教ゝくゝゝ
有ゝゝゝ天ゝん計ゝふ行ゝゝゝ祥八ゝゝふ告ゝ習ゝゝ御庇ふ立行ゝん。
妾ふ夏と呼れ行ゝ。まゝあん目ゆゝゝゝらねども。奥さゝふゝも願ゝ行ゝ宜く行へゝ。
ゝ口詛を述ゝく遽ゝく。粟津屋へゝゝ来ゝく。祥八夫婦ふ如此ゝゝく。侯鯖樓の
あゝゝふゝゝ。縡の趣を告ゝゝゝ。祥八も女房も共侶ふ教ゝゝ。その議宜ゝ
ゝゝ居べゝ。侯鯖樓ふ講釋計ゆく。心ざゝも克知ゝゝ人ふ慈善の性ゝれゝ為ゝ
ゝゝとヨゝゝん。ゝ簡を遣ゝまゝゝあゝ。習ゝ人を跟ゝく云云とゝふ
せんのゝ。他支ゝ行答ふ首尾を教ゝ阿夏ふ猛ふ心ゝそゝく。珠之丈を呼立て。
件のゝゝを説示ゝ。祥八夫婦ふ渠ゝゝゝ人を。ゝ云云と憑ミけり。ゝゝゝ少ゝ日ふ。
阿夏ふ結髪化粧ゝく。侯鯖樓ふ赴ゝ。姑くゝゝ寓居く客の招を




出像第十八

侯程ゐ。あるゐ〻ちゃ〻んそゞ妻も。情あるものゝ。ありけるとゝ。客ゐ蔦めく生活ゐ。暇あゝせゐとあゐ人ども。其二ゝ秒を拂さく雁陣長列ゆゝ青女ハ橋を粧ゐ。鶺鴒氷を渉る。冬の日子のゐゐなるまゝ。果敢〻〻去れ客ゐりけり。ごろ〻ゐる程ゐ今茲ゝ暮さく。春正月の中浣。有一日うち連立たゐ両箇の武士。各〻一箇の後者をゐく。何処ゐゆゝ〻ゐ人さゐりけん。侯鯖樓ゐ立よりて。昼飯をたゝべ酒を喫むゐゐ。ゐゐ歌妓ありと。宵さく。躭〻く阿夏を呼登。調ゐせゐ去ハ酌を執〻く。血を飛〻。笑ひ樂む程ゐ春の日ゐゐ〻ら尚短〻く。下晡ゐゐ〻ゐ。件の武士ゐゐハ酒席の價をあゐゐ取〻く遽〻くゐり去んとゐゐる。そゞ中に一箇の武士。年才ハ三十あまりゐゐ。ゐんとゝ又立飯りく。霎時あゐゐ耳ゐけり。畢竟這武士。あゐゐゐ對ひく。ゐゐゐゐを相譚ひけん。そハ次の巻ゐ。解分ゐを聽さゝ〻。

近世説美少年録第二輯巻之二終